リーチ先生 (2)

（イギリス人の芸術家バーナード・リーチとその弟子・沖亀乃介は、美術評論家・柳宗悦の家に造った窯で陶器を焼き上げました。しかし、無理に火を入れ、また、窯を早く開けてしまったことで、陶器はひどい状態になっていました。）

亀乃介は、ひとつひとつ、作品を地面の上にきちんと並べていったが、①手袋をした手が震えてしまうのを止められなかった。

――これはひどい。

こうなってしまったのは……自分のせいだ。

あんなふうに火を入れたら危険なことは、わかっていたはずだ。それなのに、火事になる危険を冒してまで、燃やしてしまった。

窯を開ける頃合いも、いまではなかった。落ち着いて、もっと時間をかけて開けるべきだったのに――。

わかっていたのに、焦る先生を止めることができなかった。

自分のせいだ――。

絶望にも似た気持ちが、亀乃介の中に広がった。自分ですら、こんな気分になっているのだ。先生は、どんなに落胆していることだろう。

亀乃介は、がっくりと肩を落とした。激しい後悔が、嵐のように胸中に渦巻いた。

勇気をもって、リーチに進言できなかったことが悔やまれた。（中略）

「カメちゃん」

リーチに呼びかけられて、亀乃介は、うつむけていた顔を上げた。

額に汗をしたたらせながら、リーチがすぐそばに佇んでいた。両手に小さめの壺を抱えている。

「……これを、見てくれ」

リーチが差し出した壺を、亀乃介は両手を伸ばして受け取った。

それは、※青磁の壺だった。

見たこともないような深みと豊かさのある、美しい翡翠色。

表面にはざらつきがまったくなく、つややかな肌は朝日を反射して白い光を放っている。

――これは……。

亀乃介は震える瞳を上げてリーチを見た。リーチの顔に光が差しているのがわかった。

柳が歩み寄って、「どれ」と亀乃介に向かって手袋をした両手を差し出した。そして、壺を受け取ると、朝日が降り注ぐ中にかざして見た。

柳が目の前に掲げた壺を、リーチと亀乃介はじっとみつめた。

②まるで、翡翠色の水鳥のようだった。

柳の手から澄んだ夏空へと飛び立ってしまいそうな、みずみずしさと活力とがその壺には宿っていた。

柳は、リーチのほうを振り向くと、口元に微笑を浮かべて、ひと言、言った。

「――好いね」

③リーチの顔がたちまちほころんだ。

（原田マハ『リーチ先生』集英社 による）

※青磁…青緑色の陶磁器。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「手袋をした手が震えてしまうのを止められなかった」とあるが、このときの亀乃介の心情として適当なものを選びなさい。

ア ようやく出来上がった作品に万一のことがないように、慎重に作業を進めようと緊張する気持ち。

イ 作品がひどいものになったことに怒りがわき、進言を聞き入れなかった先生を責める気持ち。

ウ 焦る先生を止めることができなかったことを後悔し、作品の出来に強く落ち込む気持ち。

［　　］

(2) ——線②「まるで、翡翠色の水鳥のようだった」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 青磁の壺の美しい色合いや、みずみずしさと活力の宿る姿を、直喩をもちいて表現している。

イ 青磁の壺の背景に広がる青空や、朝日のまぶしさを、擬人法をもちいて表現している。

ウ 青磁の壺の出来を確かめる柳の姿を、リーチと亀乃介の視点から比喩的に表現している。

［　　］

(3) ——線③「リーチの顔がたちまちほころんだ」とあるが、このときのリーチの様子として適当なものを選びなさい。

ア そっけない柳の言葉に、意図がわからず当惑する様子。

イ 壺の出来を評価する柳の言葉に、喜びがこみ上げる様子。

ウ 自分とは異なる感想を述べる柳の言葉に、不安を感じる様子。

［　　］